

JOMA 通信

1987. 3. 30 No. 29

海外宣教連絡協力会公報
Japan Overseas Missions
Association

発行者 河井清治

事務局 〒168 東京都杉並区高井戸東2-25-11-308
海外宣教連絡協力会

TEL (03) 335-3049
郵便振替東京 6-106631

宣教師と教団の狭間にての喜び

新谷正明

小生はH教団の海外宣教部の責任者となって11年になるが、この間、宣教師二家族とひとりの宣教師を台湾・フィリピンへ派遣し今日に至っている。

これまでの働きは正直のところ、試行錯誤の連続であり、また他の宣教団体に倣うところも多々あった。幸いこの間、徐々に全国の諸教会にこの働きが理解され、このために重荷を負う教会や支援者たちが起こされ、財政的サポート体制も強化されつつあり、また、宣教地へ夏季神学生を派遣したり、小グループの宣教地視察団を送ったりする中より、宣教師志願者や支援者が起こされつつあり感謝である。

派遣者側にとっての何よりの喜びは、宣教地での靈魂の収穫などの良きニュースである。また、宣教師が帰国して、デプュテーションで各教会を巡回するとき、地方の小さな教会の無名の隠れた支援者たちの宣教師への励ましと支援継続の約束である。

また、もうひとつの喜びは、海宣部のわれわれが、教団と宣教師とのパイプ役を十分に旨く果たし得ている時である。その反対に、心が痛むのは、私達が教団サイドに立って宣教師と相対立してしまい、宣教師から誤解されたり、疎通しなくなったり、海を越えて彼等の怒りや悲しみが伝わって

くる時である。

「派遣責任者は常に宣教師の味方として、対教団においては、常に宣教師の側に立つべきである。」とはこの分野の先輩師から聞いた言葉であるが、至言であろう。

このような事々の後、気まずい思いで宣教地を訪ね、宣教師やその家族との語らい、交わりの中かで、主の憐れみにより、すべての誤解や問題が氷解し、宣教師たちの笑顔を再び見ながら帰国できる時は喜びであり、これぞ派遣責任を負う者への主からのボーナスではなかろうかと思う。

教団による海外宣教の働き強化とその推進の鍵をにぎるのは、末端の諸教会ではなく、実は教団の首脳陣たちであることに近年気付かされて来た。教団全体の関心と重荷などの大半は国内宣教に向けられがちな状況の中で、教団のリーダー達の海外宣教への積極的、肯定的な奨励や責任ある一言は千金に値し、我々海宣部のどんな啓蒙活動も及ばないほどの推進力となって教団全体へプラスの影響を及ぼしゆく。こうした指導者が神学校の教師などの場合の若い神学生への影響は更に大であることを感じさせられている。

近年、聖地イスラエル旅行などに教界の指導的立場の方々引率して行かれることは幸いなことであるが、出来たら教団の指導的立場にある方々

には、是非、宣教地へもひんぱんに旅行していただきたいと思う。そこで日本人宣教師たちに会うだけでなく、現地のクリスチャンリーダーたちに会い、交り、意見の交換をなして来てほしいと願うものである。こうしたところから、日本の教会

の画一的、閉鎖的、非国際的、島国的な現状が打破され、多様性と開放性と国際性に富んだ世界宣教のわざを担う成長した日本の教会となりうる事を信じるものである。(日本ホーリネス教団海外宣教部主事。JOMA役員)

世界宣教とアジアの教会・

アジアの教会と日本の教会

ディビッド・趙博士

(1986年度JOMAセミナー講演要旨)

〈ディビッド・趙師は、韓国East-West-Centerの所長。1986年までアジア宣教協力会(AMA)の総主事。アジアの視点からの海外宣教活動の指導者として活躍中。〉

キリスト教は動く宗教

使徒の働きは、宣教の総合計画書と言える。キリスト教が異邦人のためのものであることが明らかにされている。特に8章を区切りに、人物も、場所も変わり、ユダヤ人から異邦人へという動きが見られる。使徒の働きの最初はエルサレム、最後はローマである。キリスト教は動く宗教である。イエスも常に動いておられた。使徒の働き8章でピリポに対し、聖霊が、何度も「行け」と語っておられる。聖霊は、宣教の方法、場所、時間について、具体的に、徹底的に、継続的に、私たちを導き、私たちに「動く」ことを教えておられる。

宣教は創世記から

世界は私たちのものではない。どこかの権力ある国家の所有ではない。神がお創りになったものである。神は、その独り子を御国から遣わして下さるほどこの世界を愛しておられ、滅びるのをだまって見てはおられない。宣教の基本的な動機は、この神の愛にある。神が、ご自分でお創りになった世界に対して語られた最初のことは、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。……支配せよ。」である。ここから宣教が始まっている。ノアに対しても、洪水後「生めよ。ふえよ。地にふえよ。」と主は語られた。アブラハムに対しても、「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」と主は言われる。それに



セミナー講演中の趙博士

よって、「地上のすべての民族は、……祝福される。」のである。だから、行かねばならない。動かなければならない。

神は、世界のために教会を下さったのである。教会のために世界を下さったのではない。教会が世界を忘れたら、教会でなくなる。クリスチャンが世界を考えると、宣教を考えないわけにいかない。

西欧の宣教の問題点

以上のような観点で考えていくと、過去の西欧の教会による宣教の歴史における、宣教の動機は聖書的だったのだろうか。アジアでも、アフリカでも、宣教、またキリスト教に対して、ネガティブな見方が広がっている。それは、過去の宣教が政治的植民主義と、一緒に進行した点に原因がある。結局、支配者の宗教に奴隷が従った。キリスト教は、奴隷の宗教になってしまった。だから、第二次大戦後、独立した国々は、反キリスト教的

になってしまった。アジアの教会の責任は、過去の西欧の宣教のやり方を受け継ぐのではなく、聖書の教える宣教に従い、過去の傷ついた宣教のイメージを建て直すことにある。例えば、中国に今宣教の門戸が開かれようとしている。アメリカの宣教団体が入ろうとしているが、私は、中国の宣教は、中国人——全世界にいる華僑の人たちに、先ず行ってもらうべきだと考えている。私たちは自分の国の教会を輸出すべきではない。その国の人たちの教会を建てるのが目的。どこの国から来たかは忘れ、神のみことばのみを教えるべきだ。宣教師は、名も無く、地位も無く、助け手として涙と汗と血を流して仕えるしもべなのである。

アジアの教会の責任

私たちも、過去の西欧の宣教の犯した誤りを繰り返してはいないだろうか。韓国から、イランやサウジ・アラビアに技術者、労働者が派遣されているが、それと一緒に、宣教師がチャプレン、カウンセラーとして同行している。これは昔の植民政策と癒着していた宣教のあり方と、それほど変わらないのではないか。私たちは、誤った過去から断絶し、聖書的使徒的な宣教を継承していかなければならない。

アジアは昔のアジアではない。昔は、植民地だったから、入国の問題はなかった。今は、受け入れる国の同意が必要だし、受け入れ団体も必要である。昔は教会が無かったが、今は、すでに教会がある。新しいものを作るのではなく、共に働くという姿勢が求められている。そのようなアジアにおける宣教を考えると、アジア人同士の協力がどうしても必要である。数百年、あるいは1,000年の教会の伝統を持つ西欧社会と、せいぜい100年程度のキリスト教歴史しかないアジアとは、あらゆる面で違う。自由を謳歌している西欧と、様々な社会的制限が課せられているアジアの国々とは、違う。そういう意味で、宣教師派遣団体のあり方も、考えなくてはならない。西欧で生まれた宣教団体が、アジアの各国に委員会をもって活動しているケースがあるが、私の考えでは、それはSONY IN TAIWANのように多国籍会社のようなもので、特定の宣教団体の単なる多国

籍化に過ぎない。宣教団体は、民族的な等質性を持つべきである。そういう意味で、私は、これからは、transnationalizationという考え方が必要だと思う。つまり、それぞれの国の宣教団体が、それぞれの主権を認め合いつつ協力するというあり方である。韓国の場合、スーダン・インテリア・ミッション(SIM)と、韓国長老教会が、宣教師派遣について対等な立場で協力の契約を行なった。ウィクリフの働きも、韓国独自の団体との協力関係を持つようになっている。

日本の教会への期待

韓国の教会は、確かに強い。しかし、日本の教会の協力なしに、アジアの宣教は前進しない。エルサレムから始まったキリスト教が、ローマを征服して初めて、世界的に拡大していったように、日本が福音によって征服されることが、重要な鍵である。ぜひ、日本に、このアジアの宣教のリーダーシップを取っていただきたい。

(文責事務局)

— JOMA 加盟団体及び

宣教師の動向—

アジア福音宣教会 最近の中央委員会で、福音主義に立つ神学校に学ぶ神学生で、台湾宣教に重荷を持つ方々に現地視察希望者に旅費援助(5万円)をすることに決定した。詳細は宣教会へ(075)432-1025。鷹羽富美子宣教師、松元節子宣教師はそれぞれ、6月、9月に短期(3ヶ月)帰国の予定。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団海外伝道部 佐藤信子宣教師(台湾)、佐々木正明・陽子宣教師(フィリピン)は、それぞれ5月までに帰国、巡回報告の予定。佐藤師は、マカオから中国本土への宣教を検討中。

日本ウィクリフ聖書翻訳協会 昨年5月に、従来の国際ウィクリフ聖書翻訳協会日本委員会から上記の名称に変更した。国際的に日本の働きの自主性が認められ、日本協会としての独自の規約も作成している。中高生のためのパンフレット「キミにピッタリ!ウィクリフの奉仕」が完成。希望者に無料で頒布中。第7回夏期言語学

事務局だより

講座を7月21日から8月21日に開催する。異文化コミュニケーション、音声等、言語分析、外国語の学び方などのコースあり。

詳細は(03)313-5029へ。橋本一雄宣教師は9月にニューギニア帰任予定。

アンテオケ宣教会 10周年記念大会を3月26日開催。安海靖郎宣教師夫人及び4人の子どものうち下の2人は4月にインドネシアに出発。上の2人(高校生)は日本で学ぶ。田中久美子宣教師は、ビザは与えられたが、同労者が与えられたら、6月までにパキスタンに帰任予定。杉山星則師(アルゼンチン)は、会堂が与えられたが、修理工事に苦闘中。森本正之、平野嘉春宣教師(インドネシア)は、お子さん方の教育で苦闘中。乞お祈りとのこと。

国際福音宣教会(OMF) 牧野直之・伊豆宣教師は8月にタイより帰国。9ヶ月間のデビュテーションに入る。小川国光・裕子宣教師は10月にシンガポールより帰国。国内奉仕及び国外研修を予定している。入月英明師は休職中。今後の導きを待っておられる。

聖書同盟 岩井満宣教師一家は3月にシンガポールより4年の任期を終えて帰国。今後は、東アジア地区聖書同盟協力主事として、年数回の海外奉仕を行ないつつ、国内の聖書同盟の働きに従事する。

PBA海外電波宣教を支える会 尾崎一夫宣教師は6月まで宣教師として南米に滞在中。

東洋ローアキリスト伝道教会海外宣教委員会 中華ローア福音伝道教会に小野寺義尚師を派遣しているが、教会設立十周年記念集会在4月26日に開催される。

南米宣教会 マナウスで奉仕する中田智之宣教師のもとへ、数名の宣教協力者(幼稚園、小学校教師等)が出発待機中。

日本福音自由教会海外宣教委員会 現在、奈良市で開拓伝道中の島先克臣師を将来フィリピンに派遣すべく準備中。

日本ホーリネス教団海外宣教委員会 昨年11月に教団海外宣教大会を、アンテオケ宣教会の安海宣教師を迎えて開催した。

・1986年度JOMAセミナーは、10月20、21日那須ハウス・オブ・レストを会場に45名の参加者を得て開催されました。帰国中の森本憲夫宣教師夫妻、白井澄子、中田智之、田中久美子、安海靖郎各宣教師も参加して、奥山実師、D・趙師の講義ともども、よき学びと交わりを与えられました。

・セミナーに引き続き、海外宣教大会が、21日夕青年会館にて開かれました。280名の方々と共にメッセンジャーズの賛美、森本憲夫宣教師、長沢久美子宣教師の証し、羽鳥明師の力強いメッセージを味わいました。3名の方々が海外宣教への献身を表明、13名の方が一般宣教への献身を表明されました。特に地元の教職の方々の協力のおかげで、素晴らしい集会になったことを感謝しています。

・1987年度JOMA総会は、次のように開かれますので、お祈りください。

日時 1987年4月20日(月)1:00~4:00PM

場所 お茶の水学生キリスト教会館

内容 新年度の事業計画、予算審議及び特別講演「アジア宣教協議会に参加して」(奥山実師)

・11月下旬に、タイ・ネパール宣教地訪問ツアーを実施検討中です。詳細決定次第お知らせします。

会計報告

		86年度予算	87.3.16現在
収入の部	会費	462,000	462,000
	セミナー特別献金	330,000	160,000
	献金	120,000	384,111
	雑収入	100,000	77,566
	前年度繰越	51,819	51,819
	計	1,063,819	1,135,496
支出の部	セミナー費	330,000	492,299
	文書費	100,000	41,450
	役員会費	120,000	140,780
	事務所費	300,000	250,000
	事務費	100,000	57,560
	総会費	20,000	13,300
	予備費	93,819	20,000
	小計	1,063,819	1,015,389
次月繰越		0	120,107
	計	1,063,819	1,135,496